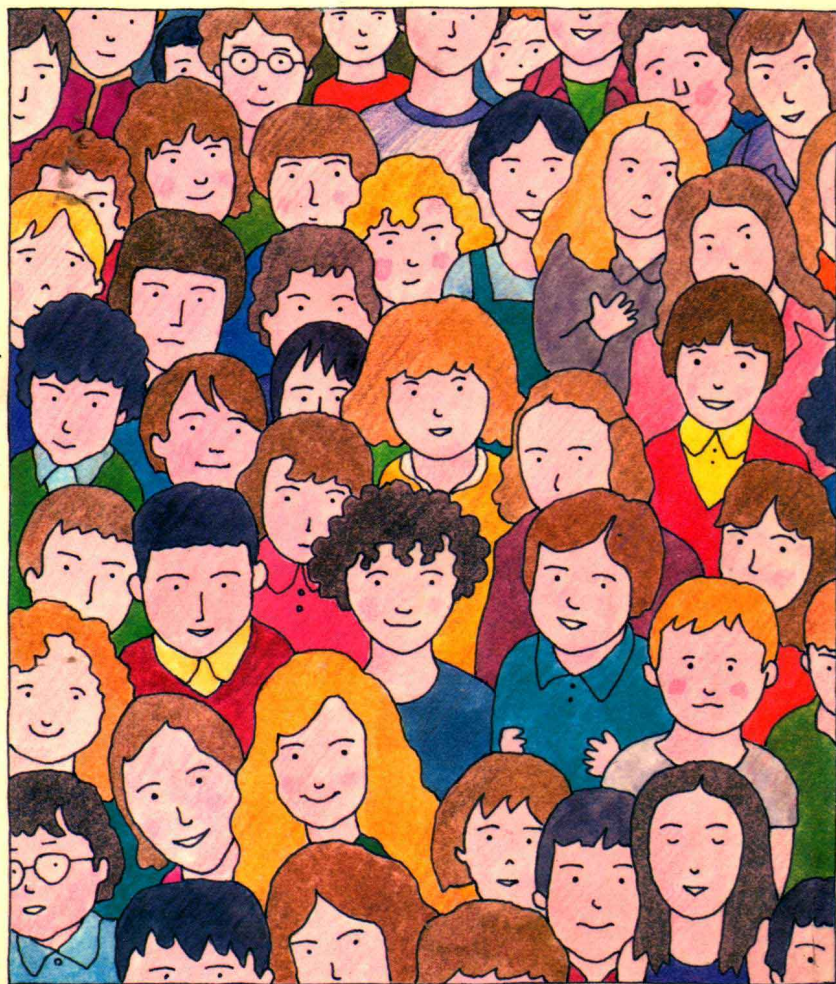


子供たちの時間

フランソワ・トリュフォー

山田 宏一・訳



供 た ち の 時 間

フ
ラ
ン
ク
・
ト
リ
ユ
ー
ー

山
田
宏
一

訳

子供たちの時間

昭和五十四年十二月三日 第一刷発行

定価 一〇〇〇円

著者 フランソワ・トリュフォー

訳者 山田宏一

発行者 野間省一

発行者 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二二 郵便番号 一一二

電話東京(〇三)九四五―一一一(大代表) 振替 東京八―三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社



落丁・乱丁本はおとりかえします。

© Koichi YAMADA 1979, Printed in Japan.

〈著者〉 フランソワ・トリュフォー

映画作家。一九三二年パリに生まれる。監督作品――『大人は判ってくれない』『突然炎のごとく』『柔らかな肌』『野生の少年』『アメリカの夜』『アデルの恋の物語』『トリュフォーの思春期』『恋愛日記』『緑色の部屋』など。著書――映画評論集『映画の夢・夢の批評』『わが人生・わが映画』(山田宏一・蓮實重彦共訳、たざわ書房)、シネロマン『女たちを愛した男』(映画『恋愛日記』を小説化したもの)など。

〈訳者〉 山田宏一(やまだ こういち)

映画評論家。一九三八年ジャカルタに生まれる。著書――『友よ映画よへわがヌーヴェル・ヴァーグ慈』(話の特集)、『走れ!映画』(たざわ書房)など。訳書にフランソワ・トリュフォー映画評論集(前掲)のほか、ジェームズ・ボールドウィン著『悪魔が映画をつくった』(時事通信社)など。

子供たちというのはほんとうにすばらしく、
私は彼らを見ているだけでばかみたいにしあわ
せになる。私は子供たちに夢中だ。もうなんに
もできなくなってしまうくらい夢中だ。

——ヴィクトル・ユゴー

L' ARGENT DE POCHE by François Truffaut
Copyright © Flammarion, 1976.
Japanese translation rights arranged with
Librairie Ernest Flammarion, Paris
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

子供たちの時間——目次

- 1 フランスのちょうどまんなか 9
- 2 アルパゴンの長ぜりふ 19
- 3 学校からの帰り道 31
- 4 歴史の時間のサスペンス 43
- 5 ジュリアンのおかしな家 51
- 6 グレゴリー坊やの華麗な冒険 57
- 7 子供たちが退屈してる日曜日 69
- 8 映画館の風景 89
- 9 託児所にて 97
- 10 教育といたずら 103

- 11 ドリュカ兄弟の床屋 115
- 12 オスカルは口笛を吹いた 131
- 13 赤ちゃんと拳銃 149
- 14 赤いバラは熱烈な恋 161
- 15 赤ちゃん教育 167
- 16 ジュリアン・ルクルーの謎 173
- 17 リシェ先生の最後の授業 183
- 18 はじめてのキス 193

あとがき 201

訳者あとがき 204

装幀／挿絵
和田 誠

子供たちの時間

1

フランスのちようどまんなか

国道と県道が交叉しているこの十字路の中央には、四角の細長い柱のかたちをした小さな石の記念塔が立っていて、そのてっぺんには三色旗がひるがえっている。台座の上のほうに刻みこまれた文字を読んでみると、「ここがフランスのちょうど中心」とある。

十字路の一角には青ペンキを塗った一軒の店があつて、フランスの田舎にはよくこんな店があるけれども、文房具から菓子類から小間物からなんでも売っている。ただ店の名だけはフランスでひとつしかない名だ。フランスのちょうどまんなか商店、というのである。

マルチヌは、ババに車をとめてもらつて、この店で、塔の写真がうつっている絵はがきを一枚買った。いとこのラウルに記念に送ることにしたのだ。

マルチヌは、十二歳。ブロンドのかわいい少女で、赤と白のストライプの、ミニのワンピースを着ている。彼女は絵はがきをポストに投げこむまえに、十字路のまん

なかまで元気よく走って行って、記念塔と絵はがきの写真をよく見くらべてみた。

「ラウール君

お元気ですか？　パパといっしょに車でブリュエル・アリシャンまで来ました。ここはフランスのちょうどまんなかですって。

わたしは今年の夏はじめて林間学校にいきます。男女合同なのよ!!　とてもたのしみ。親愛のキスを送ります。

いとこのマルチヌより」

マルチヌのいとこのラウールはチエールという町に住んでいる。中央山岳地帯の山のひとつの中腹にある小さな町だ。坂道ばかりの町で、急な石段になっているところもある。

*

その日、チエールは快晴だった。子供たちが朝の気持ちのいい空気のなかを泳ぎだすように走りだしてくる。駅のほうからつづく下り坂をすべるように走ってくる子供

たち、古い街並みやローマ橋を渡って駆けてくる子供たち。一群の子供たちが街角で消えたかと思うと、はすかいの街角からは他の一群がとびだしてくる。漫画映画みたいに、列に遅れてビヨコビヨコ一所懸命になって走ってくるちびもいる。急がないと、もうすぐ授業開始のベルが鳴るぞ！

とても、とてもいい天気だ。こんな素敵な朝を台無しにして、学校へいかなきゃならないのか。そう。チエールの小学校は早起きだし、子供たちを待っている。

低学年のクラスの担任は、リシェ先生だ。午前の一時間目は地理の時間である。

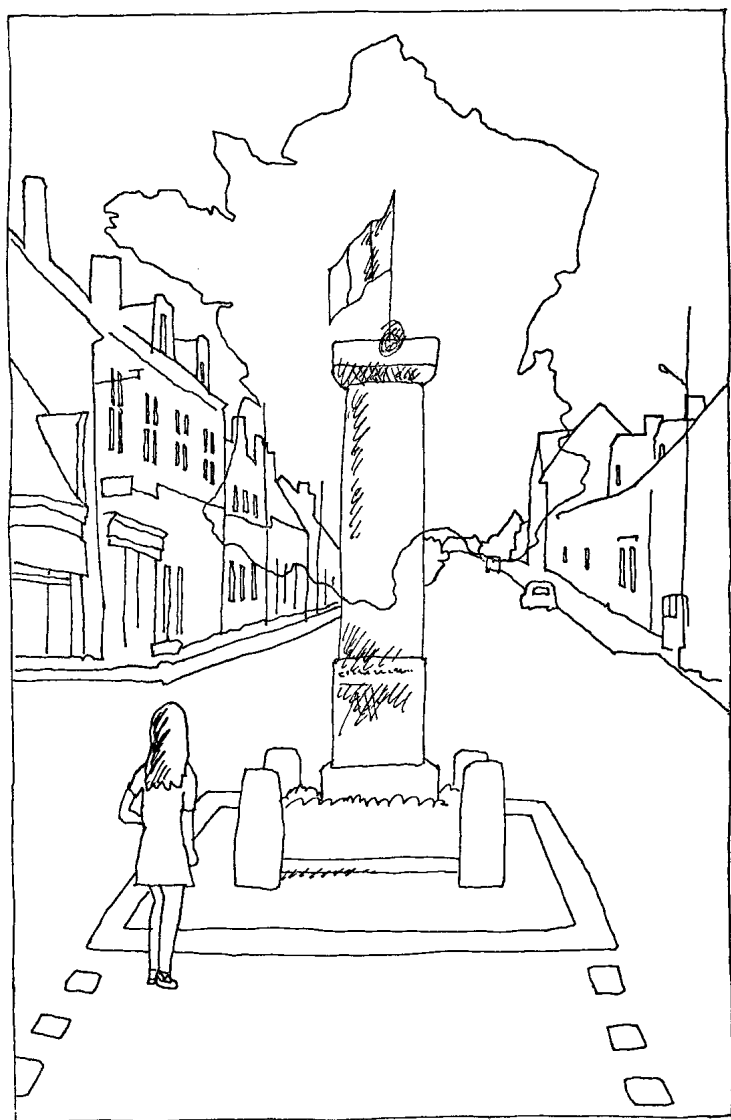
「土地は花崗岩質^{かこうがんしつ}で、川や湖が多いのもこの地方の特徴です……」

リシェ先生の読みあげるテキストを生徒たちが書き取っている。ただひとり、ぼんやりと机にひじをつけて、フランスのちょうど中心のあの記念塔の写真がうつっている絵はがきをうつとり見つめている少年がいる。目ざとくそれに気づいたリシェ先生は、朗読をやめて、

「ラウール・ブリケ、その絵はがきを持ってきなさい」

ラウールはハッとして、ブリュエール・アリシャンから三つ年上のいとこのマルチヌが送ってくれた絵はがきをあわててかくそうとした。

「なにをぐずぐずしてる、早く持ってきたまえ」



先生が催促した。

ラウールは席から立ち上がり、うなだれて、先生のところへ絵はがきを持っていった。リシェ先生は絵はがきを取って見て、それからにっこり笑った。

「おや、これはブリュエル・アリシャンじゃないか。先生もいったことがあるぞ」
ラウールは、先生のたのしそうな声を聞いて安心し、頭を上げた。この調子では黒板のまえに立たされずにすみそうだ。

「ブリュエル・アリシャンは、小さな町、いや、村の名だ。フランスのちょうど中心がここにあたるので、小さな石の記念塔が建っている。ほら、これがその塔だ。みんな、見えるか？」

トリシェ先生は絵はがきを指の先でつまんで、教室のみんなに見せた。生徒たちは、絵はがきをよく見ようとして、めいめい、首を伸ばしたり立ち上がった。リシェ先生はふと絵はがきを裏返して見て、またにっこり笑った。

「おや、こいつはおもしろいぞ。こんな住所が書いてある。ちょっと黒板に書き写してみよう」

リシェ先生は、チョークを取り、絵はがきに書かれた住所を大きな声でゆっくり読みあげながら、黒板に書き始めた。